しえん便り

R2年10月発行

みくまの支援学校支援部

本校ではコーディネーターが保育所、幼稚園、学校を訪問し子どもの様子を先生方といっしょに考える巡回相談を行っています。今年度は新型コロナウィルス感染予防のため、開始が遅れましたが６月から再開し、これまでに保育所、幼稚園、小学校、中学校などのべ１３件の相談がありました。相談内容は、行動面について、学習面について、教育課程についてなどが多岐にわたりました。今回はその中からある保育所の実践を紹介し、子どもの行動の見方、とらえ方について考えてみたいと思います。

『“待つ”を考える～巡回相談の窓から～』

大好きなお母さんとお父さんが保育参観に来られた日、Ａくんはソワソワ、ドキドキして、朝の会が終わってリズム遊びの時間になっても保育士さんの膝の上にいます。

リズム遊びの始まり。ドングリ、ワニ、お馬、ウサギ、スキップ・・・・・

ピアノの曲に合わせお友だちが木の床の広いホールを駆け回ります。Ａくんは保育士さんの膝の上からみんなの動きをちらちらと見ています。ピアノに合わせリズムをとる保育士さんの膝。揺れるＡくん。

「トンボのリズムが大好きでとっても上手なんですよ」

園長先生から事前に伺っていました。そのトンボのリズムの前奏が始まりました。Ａくんの気持ちを応援するように開かれる保育士さんの腕。その膝の上からお友だちの輪の中に駆け込むＡくん。Ａくんを巻き込みホールいっぱいに広がった“トンボ”たちはきれいな空をスイスイ飛んで遊びました。

人の発達には、できることが増える“縦の発達”と、できる場面が広がる“横の発達”があると言われます。

保育所に“突然”来られた大好きなお母さん、お父さんを前に戸惑い葛藤するＡくんに対し保育士さんが当たり前のように行った“待つ”対応は、この“横の発達”を力強くそして大らかに支える積極的な教育的活動であったと思います。この実践を可能にするためには、子どもの実態把握や、それに伴った気持ち・内面の理解、またそれらのことが保育士集団の共通理解となっている必要があるでしょう。それらのバックボーンに支えられて初めてこの“待つ”ことは子どもたちの豊かな発達を深く支える保育・教育活動になり得るのだと思います。

“内面が分かれば待つことができる”私たちが子どもたちと向かい合うとき、何を最優先するべきか、串本町の小さな保育所の実践から学ばせていただきました。

今後の和歌山大学コーディネーターフォーラム

10月28日（水）18:15～20:15
担当:古井先生
タイトル:知的障害のある人に対するパーソン･センタード･プランニングの視点と方法～本人と環境の潜在的な可能性に着目して。

11月25日（水）18:15～20:15
担当:山崎先生
タイトル:音楽療法的な視点を取り入れた特別支援教育の理論と実際。

※今年度の和歌山大学コーディネーターフォーラムは個別にリモートでの実施となります。